KANSAI UNIVERSITY

CTL Newsletter

Kansai University Center for Teaching and Learning

関西大学 教育開発支援センター
ニューズレター

June 2016
vol.21

教学 IR ができること

教育推進部　教授　森　朋子

教学IRという言葉を耳にしたことがあるでしょうか。教学IRのIRは、インスティテューショナル・リサーチの略語であり、そもそも企業が自社の経営改善に使っていた手法です。大学におけるIRでは、主に教育、経営、財務情報をも含む大学内部のさまざまなデータを分析し、その結果を大学経営や教育改善に反映することを目的とします。これまでなんとなく感覚で得ていた「教える」と「学ぶ」の成果を、様々なデータを用いることによって立体的に「見える化」しようという試みです。本学でも、2年前に教学IRの組織が誕生し、学生の学びの質の保証をさらに向上させるための基盤の活動となるべく、現在、活動中です。

日本に限らず、世界各国の大学にも教学IRが多く導入されていますが、そこでの目的は、「教える」の改善をどのように進めるか、に重きが置かれています。例を挙げるとすれば、ある教育プログラムにおいて、学生の満足度が低いということがアンケート調査で明らかになれば、その要因を他のデータも含めて検討し、具体的な改善案を提示し、実行する。そして数年後、同様のアンケート調査において、満足度の数値が上がれば、改善が図られたと考えられる、といったストーリーです。現実では、非常に複雑な要因がいろいろと絡み合うので、このように単純化できる事例はあまりありませんが、データをベースに教育の改善を図っていく、というのが大きな改革の流れです。

このように「教える」を改善することにおいては大きな力を発揮する教学IRですが、課題も見え隠れします。特に、肝心の学生の学びの向上には、これまで直接的に威力を発揮できずにいました。そこで本学の教学IRは、本来の「教える」に加えて、新たに学生の「学ぶ」そのものをサポートすることをその目的に掲げています。具体的な案として、2つほど考えています。まずは、いろいろな調査結果を広報物にしてキャンパス内で共有すること、これはすでに2015年度入学時調査において実現することができました。次に本学における学生の学びの軌跡や成長を「見える化」し、それを個別にフィードバックすることです。個々の学生が持っている強みや課題を視覚化することで、教職員による、より質の高い学修支援が可能になります。さらに学生自身のメタ認知も刺激することによって、本学にある様々な教育・学習プログラムの、より積極的かつ主体的な活用を促すことができるとも考えており、今現在、その可能性を探っています。

「教える」も「学ぶ」も、すべてが数値で表されるわけでは到底ありません。それでもその現状をデータという形で示し、それらを大学の構成員である学生、職員そして教員のコミュニケーションツールとして活用することで、対話が生まれると考えています。